



県立広島大学 Prefectural University of Hiroshima

# 地域連携センター報

Vol. 17

COMMUNITY LIAISON CENTER

平成25年11月1日発行

県立広島大学地域連携センター

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号 電話082-251-9534 E-mail:renkei@pu-hiroshima.ac.jp

## 県立広島大学地域連携センターの役割

県立広島大学長 中村 健一

古くから大学は、「教育」と「研究」の実践を主たる使命に据えてきました。2006年に改正された「教育基本法」第7条において「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」として大学の役割が定められています。すなわち、大学から社会への発信は、教育、研究の成果を完遂した後にくるべきものという発想です。しかし近年では、地域社会の課題解決や地域産業の振興、産学官・地域連携等を通して大学が、地域に対してより積極的に関わることが期待されるようになりました。さらに、学生に求められる社会力が地域社会との関わりで大きく育まれることなども起因し、地域から期待される「社会貢献」が大学の第三の使命として強く認識されるようになりました。2012年に文科省は大学改革実行プランの中で、知（地）の創成拠点としての大学の存在を提示しております。本学は2005年、再編・統合により県立広島大学として誕生しましたが、基本理念に「地域に根ざした県民に信頼される大学」を掲げ、「教育と研究の両面から、地域や社会の諸問題の解決に取り組む」を掲げました。すなわち開学当初から地域との連携を意識し、教育、研究と共に、社会貢献を大学の重要な役割に据えて活動を行ってきました。大学の地域に対する意識の先見性が、本学では早くから定着していたことを示しています。



こうした地域との連携を担う上で大きな推進力の役割を果たしているのが、地域連携センターです。開学と同時に広島、三原、庄原の3キャンパスに設立されました。現在、各センターが地域のアンテナとなり感度良く県内の地域の問題を鋭くキャッチし、学内の研究力と教育力の総力を生かして地域課題の解決に努めています。そうした地道な努力の結果、地域連携センターを介して8つの市町と9つの金融、経済団体等との包括協定を結ぶことができました。協定地域との絆を拠点として「地域貢献」活動は着実にその成果をあげており、本学に対する地域の信頼を高める効果を発揮しております。本学は現在、法人化後7年目に入りました。本年度は、第2期中期目標・計画の初年度にあたります。「地域再生の核となる大学づくり（COC構想の推進）」を本学のこれから取り組む地域貢献のコアに設定しました。知識基盤型社会の到来に向け、本学の持てる教育力と研究力を十分に引き出し活用する上で、地域と大学の架け橋を担う地域連携センターの役割はさらに大きくなります。地域連携センターの益々の活動・発展に期待しております。

# 庄原キャンパス

SHOBARA CAMPUS

## 国際交流

### JICA研修

本年度は研修名が変わり、「集団研修 中小企業振興政策(E)」として、アルバニア(1名)、カザフスタン(2名)、コソボ(2名)、マケドニア(3名)、モルドバ(1名)、モンテネグロ(1名)、セルビア(1名)、ウズベキスタン(1名)の8か国、12名の参加があり、6月20日～7月26日の日程で実施されました。研修では日本の中小企業振興、金融システムなどの理論を学ぶと同時に、世羅町、庄原市、三次市、広島市などで第三セクター、産官学連携、6次産業、道の駅や中小企業大学校の制度等について学び、県内各地の企業を視察しました。加えて、国や県などの地域振興政策、中小企業支援政策の講義を聞き、帰国後に実施するアクションプランの作成に盛り込みました。



本学への表敬訪問

## 産学官連携

### しょうばら産学官連携推進機構総会

庄原市・庄原商工会議所・備北商工会・東城町商工会・庄原農業協同組合・本学から構成されているしょうばら産学官連携推進機構の平成25年度総会が6月3日(月)庄原グランドホテルにて開催されました。約30名の出席者のもと、すべての議案について原案どおり承認されました。今年度当機構は発足10周年を迎え、設置目的である「活力ある地域を創造する」ためにマッチング事業を中心に事業を展開することとなりました。

## 地域連携 「道の駅たかの」に雪室設置

平成21・22年度にかけて庄原商工会議所が主体となり、庄原市建設業協会、本学などで庄原雪資源活用プロジェクト協議会を結成、実験施設の雪室を建設し、種々の実証試験を行いました。その結果、庄原市で雪の通年保存が技術的に可能なこと、雪という自然エネルギーにより日本酒などの加工食品の熟成ができること、野菜・青果・花卉などの保冷保存によって旬をずらして出荷し得ること等がわかり、付加価値を付与できることが明らかになりました。その実証的成果を基に、平成25年度春、庄原市が「道の駅たかの」の敷地内に西日本初の雪室を建設しました。雪の貯蔵量は約1,000トンに及び、貯蔵庫も実験棟の約3倍の容量を有します。貯蔵雪・貯蔵品を実際に見て、冷気を体験できるコーナーも設けるなど、「道の駅たかの」の雪室は特色ある誘客施設として注目されています。

## 公開講座

庄原市教育委員会と本学が共催する県立広島大学市民公開講座「“わたし”を科学する」が6月25日から7月16日の期間に4人の講師によって実施されました。43名の応募があり、最終的に28名の受講生が修了証書を得ました。延べ参加人数は125名でした。後期には大学の大型機器を活用した講座を実施します。

回	講座名	講師
1	わたしの変化 ～老化を科学する～	生命環境学部 斉藤 靖和 准教授
2	実践的にからだのことを考えよう ～スポーツ・運動の常識についてあれこれ～	生命環境学部 楠堀 誠司 准教授
3	わたしの部品“タンパク質” ～今研究している私の部品について～	生命環境学部 小西 博昭 教授
4	わたしを生み出す脳の働き ～こころの座としての脳～	生命環境学部 坪田 雄二 准教授



### 平成25年度三次イノベーション会議総会

三次市および三次商工会議所、三次広域商工会、そして本学で構成している三次イノベーション会議の平成25年度総会が5月31日に三次ロイヤルホテルで約30名の出席を得て開催されました。会長の増田三次市長の挨拶のあと、昨年度の予算と決算、今年度の予算と事業計画、役員人事の順に審議され、いずれも原案通り承認されました。議事の後に新しい構成員を含めて発言が促されたところ、課題解決への展望や技術的な紹介など、活発な情報交換が行われました。

## 研究紹介

### 食品からの生体機能調節物質の探索

生命環境学部生命科学科 教授 田井章博

我々の健康維持のためには、薬による疾病の治療だけでなく、食品機能による疾病の改善・治療補助が可能ではないかと考えられます。また、食品成分を用いることにより治療から予防へと幅広く展開できる可能性があります。当研究室では、食品に含まれる生体機能調節物質の化学的探索やその活性評価、また食品成分の生体内での生体調節機構や生体の応答機構の生理的解明を中心に研究を行っています。また、生体機能調節作用を持つ生体関連物質及び食品由来物質を探索し、さらにそれらを化学的又は酵素学的処理を施して有用な機能性素材へと転換することも行っています。以下に示す研究で、ヒトの健康維持（疾病予防、疾病治療）に貢献できる食品、化粧品、医薬品素材の開発を目指しています。

1) 疾病の予防を目的とした研究：a) アスコルビン酸（ビタミンC）の化学修飾とその応用研究，b) 持続的な抗酸化作用を示す食成分の探索とその生理的意義付けに関する研究

2) 疾病の治療を目的とした研究：a) 抗腫瘍成分に関する研究，b) 抗アレルギー成分の探索とその作用に関する研究，c) 神経再生を促進する成分に関する研究

これからの社会が直面する高齢化問題，食糧問題，環境問題，エネルギー問題の中から高齢化問題にターゲットを絞り，《高齢化問題にどう立ち向かうか？》という課題を我々なりに研究を通して解決していきたいと思っています。

### 西洋古代哲学研究

総合教育センター(生命環境学部兼務)准教授 大草輝政

プラトンを中心に西洋古代哲学の研究をしています。プラトンは、全著作が現在に伝えられている最古の哲学者、また今日「哲学」という名で呼ばれている学問分野を創案した人とも言われます。ヨーロッパ哲学の伝統は「プラトンへの脚注」と表現されることもあるほど、その内容は豊かで、著作内のテーマはどれも興味深いものばかりですが、最近はとりわけ「学習とは想起である」という想起説の意義、影響史に関心をもっています。

プラトンの初期対話篇では、相手を吟味し論駁するソクラテスの姿が印象的に描かれますが、無知を自覚するソクラテスの実質的な手続きは、正解の押しつけではなく、むしろ問答過程で対話相手の信念間の不整合を突くのみです。しかし、そんな方法で、どうやってソクラテスは特定の結論を導くことができるのでしょうか。また、いかにして結論の真理性が保証されるのでしょうか。このような疑問から出発して、ソクラテスの探求方法や、想起説の意義について、主に考察しています。

現在、プラトン著『メノン』の翻訳にも着手しています。時代的・空間的に隔たりのある古典の精読は、遠回りのようでありながら、現代社会や自らの思考を相対化し、新たな活路を見出すための優れた方法の一つであると考えています。身近な作品と感じていただけるよう、訳出の際は工夫したいと思っています。

## 地域連携 三原市産たこを使った加工品

三原市県立広島大学研究開発助成事業などにより研究してきた生命科学科の吉野智之准教授のグループでは、三原市の企業(有限会社蔵)と協同で、三原市の特産であるたこの加工食品の機能性を評価し、さらに新たな加工食品の開発を行いました。たこを特殊製法で乾燥し成形したたこ100%せんべいには、マウスによる動物実験(20日間の自由摂取)において、血中コレステロールやトリグリセリド(中性脂肪の主成分)、グルコースの濃度を下げることがわかりました。これは、たこを乾燥することにより、たこの成分が濃縮されたためだと考えられます。さらに、たこ100%せんべいの濃縮されたミネラルを利用し、たこ塩(商品名:蛸塩)を開発しました。たこ塩の塩分は69.4%と従来の塩に比べ、約30%の減塩された加工塩となりました。

たこ100%せんべいやたこ塩などの関連した商品は、三原市の道の駅「みはら神明の里」や広島市の「ひろしま夢ばらざ」などで販売されています。



# 三原キャンパス

MIHARA CAMPUS

## 産学官連携

### ひろしま産業振興機構による三原キャンパス訪問



公益財団法人「ひろしま産業振興機構」が例年実施している大学研究室訪問が、本年度は本学三原キャンパスにて、3月14日(木)に開催されました。三原キャンパスの教員は研究者であると同時に、患者さんや障害のある方の治療やリハビリテーション、生活支援を行うスペシャリストです。三原キャンパスは附属診療所をもち、多くの教員が脳卒中や発達障害をはじめ様々な障害をもった方々の治療や指導に携わっています。そのため、患者さんや障害のある方の福祉機器に対するニーズを日常的に理解しており、その適用とフィールドテストを行う中間ユーザーの立場にあります。

従来の研究室を訪問し意見交換を行ってシーズとニーズのマッチングをするというスタイルとは視点を換え、大学教員を顧客と捉えて、三原キャンパスの教員が把握している具体的なニーズ情報の中から、自社技術を活かせる部分を見つけ出すことを重視しました。

当日は、保健・医療・福祉の分野に接する機会がほとんどない参加者を想定し、学部の紹介と各学科・専攻や附属診療所を見学し、その後、5名の教員が「こんなことができないか、こんな道具がつかれないか」を念頭にプレゼンテーションを行いました。



今回、27社42名と予想以上の参加者で、参加理由は、商品開発のヒントにしたい、自社技術の利用価値を探りたい、異業種の交流や先端情報の収集、現場の生の声が聞きたい、リハビリ・介護分野への関心等でした。

新たな成長産業として期待が高まっている医療・福祉分野への参入を考えている企業と大学の連携の必要性を間近に感じる事ができたよい機会でした。なお、5名の教員の発表テーマは以下のとおりです。

金井 秀作 教授	砂浜歩行研究
長谷川 正哉 講師	これまでの理学療法学科の研究成果と今後の開発の提案
塩川 満久 准教授	シルバーカーの開発
土田 玲子 教授	学校における発達障害児サポートグッズの開発
小野 武也 教授	膝関節運動記録装置の開発

(保健福祉学部作業療法学科 教授 近藤 敏)

### ●今後の講座等のご案内●

#### ■広島大学との合同学会

テーマ「ヘルスプロモーションを支える技術」

日 時：平成25年11月2日(土)

場 所：本学三原キャンパス1号館1階大講義室

対 象：どなたでも参加できます

参加費：無料

#### ■第11回脳をみるシンポジウム in 三原

テーマ「結ぼうー心の絆ー」

日 時：平成26年3月1日(土)

場 所：三原リージョンプラザ

(広島県三原市円一町2-1-1)

対 象：どなたでも参加できます

参加費：500円

※学生、65歳以上、心身に障害のある方及び付き添い者1名は無料

#### ■三原シティカレッジ

三原地域連携推進協議会と県立広島大学が連携して、市民を対象にした講座を開いています。

※三原シティカレッジの内容については下記のホームページをご覧ください。

<http://www.mhr-cci.org/renkei/>

## 地域貢献

さる5月25日(土)と26日(日)、三原市宮浦公園、三原市芸術文化センター(ポポロ)とその周辺で「第22回三原さつき祭り」が開かれ、好天にも恵まれて2日間で10万人近い市民が訪れました。

この祭りは、三原の市花であるサツキが見ごろとなる毎年5月下旬、野外ステージでのコンサートやフリーマーケットなど市民参加型のイベントを通じて、地域の絆を深め街の活性化につなげることを目指して、三原商工会議所などによる実行委員会の主催で行われています。

本学では、平成7(1995)年の県立保健福祉短期大学開学以来、学生自治会が中心となってボランティアスタッフとして祭りの運営に協力してきました。

今年も、1年生ほぼ全員と2年生の自治会役員など約200人が参加。実行委員会での祭りの企画への参画のほか、駐輪場での誘導・整理、ごみの分別回収や各種イベントコーナーの受付・進行など重要な役割を担いました。また、野外ステージでは、ハーモニーサークル、吹奏楽部、軽音楽部、ダンス部の学生たちが日ごろの練習成果を披露しました。

三原市外の出身者が大半の学生たちにとって、地域の祭りで市民の皆さんと交流できることは貴重な経験であり、本学としてもこれまで地域連携センターがボランティア保険に加入するなど積極的に応援してきました。

このほか例年三原キャンパスでは、8月の「三原やっさ祭り」のパレードに大学連が出演するほか、「トリアスロン佐木島(さぎしま)大会」にも学生が選手やボランティアスタッフとして参加しています。

地域に根ざした県立大学を目指して、これからも先輩から後輩へ良き伝統が受け継がれていきます。

(三原キャンパス事務部長 前田 宜彦)



## 研究紹介

### 医療従事者用マタニティ白衣の開発

保健福祉学部看護学科 教授 津森 登志子

今年度から新たに着任しました。前任地の島根大学医学部(島根県出雲市)では、本務の解剖学講座教員としての教育・研究の他に、附属病院に勤務する女性医療職支援部署「ワークライフバランス支援室」にも所属し、家庭と仕事の両立支援、キャリア教育事業などに関わって来ました。支援室での活動の中で、妊娠中の医師が着用できるコートタイプのマタニティ白衣が存在せず、多くの女性医師が困っていることがわかりました。そこで、産学協同で白衣の開発に着手しましたが、その共同研究先の一つが偶然にも広島市の日昇産業でした。開発の過程では島根大学医学部・附属病院に勤務する妊娠中の医師、メディカルスタッフ、教員などに試着モニターとして協力いただき、様々な改良を重ねた結果、ウエスト部分にアジャスターを付けた画期的なコートタイプのマタニティ白衣を創り上げました(平成23年5月30日島根大学より特許出願、出願番号:119862)。平成24年4月からは日昇産業のネット販売も開始され、すでに大学病院や公立病院などから院内でのレンタル用に、あるいは個人用にと多くの販売実績があるようです。今後は、この白衣の認知度がもっと高まり、多くの女性医師が快適に妊娠中の勤務を続ける一助になればとPR活動を継続していきたいと思えます。



一方で、医療職用のマタニティ白衣に関しては、まだまだ開発する余地が残っていると考えられます。様々な医療職における女性の活躍を目にする今日、妊娠中も快適に就労できる白衣を職種に合わせて開発することは、本学赴任後の新たなミッションになりそうです。



開発したコートタイプマタニティ白衣

# 広島キャンパス

HIROSHIMA CAMPUS

## 地域連携

### 平成25年度地域戦略協働プロジェクト事業 〈江田島市〉

#### 「江田島の観光資源開発」

昨年度からの継続事業として、江田島の観光振興を目的とした事業を行っています。本年度は、新たにインターネットの活用戦略を策定し、ブログやFacebookのサイトの立ち上げを目指す計画です。春夏秋冬の季節毎の「大学生が作った江田島マップ」(仮称)の構想も盛り込まれています。

#### 〈廿日市市〉

#### 「廿日市市への移住ニーズについての分析」

新規事業として、住宅団地の住み替え需要に関する調査研究がスタートしました。転出入の実態を把握し、移住ニーズについて分析することで「住宅団地の世代構成バランスをとり、団地をリフレッシュする」、「多様な地域特性を生かした交流・定住を進める」ことを目指しています。

## 産学連携

### 〈インテレクチャル・カフェ広島〉

平成24年度第2回インテレクチャル・カフェ広島が12月19日(水)にひろしまハイビル(広島市中区銀山町)にて開催されました。テーマは「福祉機器・用具の開発」です。今回は、本学が開催担当として開催準備から当日の司会等の進行役を担いました。学長の開会挨拶の後、広島国際大学、広島大学、本学から3件の発表(話題提供)があり、その後の交流会では、医療や介護・福祉ビジネスに関して活発に意見交換がなされました。

次いで、平成24年度第3回インテレクチャル・カフェ広島が1月23日(水)に、ひろしまハイビル(広島市中区銀山町)にて開催されました。テーマは「iPS細胞等バイオ技術の実用化に向けて」で、(独)産業技術総合研究所中国センター及び近畿大学より発表(話題提供)がありました。iPS細胞等の最新のバイオ技術に関する話題で活発な意見交換がなされました。



学長による開会挨拶



発表(話題提供)の様子

## 公開講座

### 「もっと知りたい広島の特産品」

広島市二葉公民館との連携公開講座(広島学セミナー)で、広島の特産品であるレモン、牡蠣、酒をテーマとして取り上げました。それぞれの特産品がたどった道のり、現状、今後の展開などをわかりやすく解説しました。



### 「古典文学でたどる海の道・瀬戸内」

3年目となる広島県立図書館との連携公開講座は瀬戸内海をキーワードとして開講してきました。今年度は古典文学作品や史料に記された瀬戸内の地名や風景を取り上げ、日本中世文学を専門とする3名の講師が講義を行いました。

### 「東アジアの現在～中国を理解するために」

東アジアをテーマとした公開講座は6年目を迎えました。今回は対象を中国に絞り、現代中国映画、出稼ぎ労働者の子どもたちの教育事情、アジアの海域交流史と華僑・華人社会、中国語の新語を取り上げました。「最近の中国の事情がわかり、参考になった」、「実例やデータによる説明に満足した」などの感想が寄せられました。

### 「食といのちと社会奉仕」

高校生・学生を対象とし、人体の成り立ち、オーラルケア、食の安心安全、食育について学ぶ講座を開講しました。若い受講者にとっては食生活を見直し、これからの生き方を考えるきっかけとなりました。

### 「みんなでつくろう！かんたんおやつ」

広島市二葉公民館と連携し、夏休みを利用した小学生のおやつ教室を開きました。2日間で延べ60名が参加し、焼きドーナツと野菜ピザをつくりました。



### 「母と子のための小さなコンサート」

広島キャンパス図書館のランドピアノを活用し、小学生と保護者のための「子どもの歌」のコンサートを行いました。



## 研究紹介

海の世界から見た  
アジア域内の交流史の研究

人間文化学部国際文化学科 准教授 岡本 弘道

現在の国際社会において、アジアの重要性は高まる一方です。人口の多さ、経済力の向上、文化の多様性など、様々な特徴を持つ現在のアジアを理解するためには、やはりその歴史を辿る必要があります。特にヨーロッパの文明や価値観が支配的になる近代よりも前の時代に、個々の国家ではなくアジアという地域として、どのような歴史を見出すことができるのでしょうか。このような問題意識のもと、これまで近世海域アジアの交流史を研究してきました。

私がこれまで主に研究してきたのは、琉球王国の海上交流の歴史です。琉球王国は明朝中国との外交関係を拠り所に、14世紀後半から約200年の間、東アジアから東南アジアにまたがる交易活動を展開しました。この時代は琉球王国が最も輝いた時代と言われますが、その交易活動を支えたのは琉球人だけではありませんでした。日本を含む東アジアや東南アジアの主要な港町には既に中国系の商人がいて、彼らのネットワークと接続することで、琉球人は交易を行うことができたのです。その意味で、琉球王国の歴史もそれ以前から続く海域アジア交流史の一部ということになります。今はナショナリズムが先行するアジアを形作ったのは、長年にわたる相互交流の積み重ねでした。その歴史を理解することは、必ずやアジアの人々との共存共栄に役立つはず。そんな思いを胸に、歴史と格闘している最中です。

## 夏休み中学生理科教室：

## 「生命の基本 -DNAを目で確かめよう-」

広島市宇品公民館と連携し、中学生理科教室を開きました。遺伝子の講義を行った後で、プロコリーからDNAを取り出す実験を各自が行いました。「学校の授業では一人ですべての実験を最後まですることは少ないので、貴重な体験ができた」などの感想が寄せられました。

コンテンツを活用した  
地域振興に関する研究

経営情報学部経営学科 准教授 和田 崇

NHK大河ドラマ「平清盛」を契機に広島県を訪れる観光客数が増えたり、韓国ドラマ「冬のソナタ」を契機に韓国を訪れる日本人観光客数が増えたりするなど、映画やテレビ、漫画、小説などの舞台となった場所を訪問するコンテンツ・ツーリズムが近年盛んになっています。各地の自治体や経済団体もこれに着目し、ロケ誘致などを通じて、映画やテレビドラマなどのコンテンツを地域振興や観光振興に戦略的に活用するようになってきました。私は最近、こうしたコンテンツを活用した地域振興に関する実証的研究に力を入れています。

例えば、鳥取県境港市の「ゲゲゲの鬼太郎」など水木しげる作品を活かした取組みと、同県北栄町の「名探偵コナン」など青山剛昌作品を活かした取組みを比較しながら、漫画を活用した観光まちづくりの成功要因として、①内発的な取組み、②著作権管理者の協力、③文化資源の集散地戦略、④現実空間(リアルスペース)における仮想世界(作品世界)の再現を指摘しました。また、「西のアキハバラ」と呼ばれる大阪・日本橋を例に、地域内部の既存権力サイドである商店街組合が外部アクターであるオタク(漫画・アニメなどの熱狂的ファン)を取り込みながら、両者が協働した「オタクの街」づくりが展開されていることを解明しました。

上記以外にも、さまざまな地域資源と社会的ネットワークを活用した地域振興の取組みについて、まちづくりコンサルタントとしての経験も踏まえつつ、実証的な研究をおこなっています。ご関心のある方、どしどしご連絡ください。

夏休み理科教室：「広島湾のちりめんじゃこ  
と生きる小さな生物を探してみよう」

小学生を対象とした夏休み恒例の理科教室を開きました。ちりめんじゃこに混ざっている生物(チリメンモンスター)を見つけてカードを作りました。また、広島湾と鯛漁の話や、ちりめんじゃこの栄養とレシピの紹介も行いました。



## 地域連携センター長・新任教員紹介

### 中谷 隆 [地域連携センター長]

2年前まで同職で4年間役目を全ういたしました。再びの登板です。この間、ずいぶんと内外の情勢が変わりました。その中で最も大きな変化だと感じられたのが、地域貢献活動を通じて学生の社会的役割意識を醸成し、社会力を身につけさせようとする教育界の動きでしょうか。本学の地域連携センターも早急の対応が求められています。教職員各位及び学外の関係諸団体の方々には引き続きご協力を賜りたくお願い申し上げます。



### 市村 匠 [広島地域連携センター長]

広島キャンパスでは、広島市を中心とする地域の連携活動として、自治体との連携事業や生涯学習、産学連携など、地域に貢献する事業を行っています。社会の変化に伴い、地域、県民からのニーズも多種多様に変化していきます。その期待に応えるため、ひろしまの特色を生かした連携事業を行い、学生参加型地域貢献の推進、ICT活用による情報発信を積極的に実施します。



### 西村 和之 [庄原地域連携センター長]

発足9年目となる庄原地域連携センターでは、地域連携業務として近隣自治体等との包括協定締結を支援し、産官学連携業務として本学の持つバイオテクノロジー、アグリビジネスや環境関連技術等の研究シーズの提供と県内の事業者シーズの育成やニーズ解決の支援を行ってきました。また、掘り起こした地域ニーズにもとづく公開講座等を通して県民の皆様の生涯学習を支援してきました。今後も、これらを継続しつつ「知の創造拠点」の一翼を担って行きます。



### 大塚 彰 [三原地域連携センター長]

本年4月から4年振りに三原地域連携センター長を拝命しました、理学療法学科の大塚です。連携センター長の任につくのは2回目となります。前回と大きく異なる点は、事務室に2名のスタッフが配されている点です。その分、連携センターの業務も大幅に増加しているように感じています。私としては、よろず相談的な窓口業務から少し脱して、真に地域や産業界および行政との連携を担っていきたく考えています。三原キャンパスの教職員の皆さまの温かいご支援を!!



### 渡辺 孝信 [地域連携センター新任教員]

この4月に着任し、知的財産・産学官連携を担当しています。以前は、会津大学でコンピュータ関連の研究成果のみを取り扱っていましたが、本学では3つのキャンパスから生み出された多様な研究成果に魅力を感じています。また、研究成果の中には実用化の可能性があるものが多く、今後の技術移転の可能性が期待できます。地域のニーズに応える地域連携に力を入れていきたいです。どうぞ宜しくお願いします。



### 編集後記

センター報第17号をお届けします。本号では、学長が、本学の地域連携センターの役割について述べています。また、各キャンパスにおける公開講座、研究紹介、本学学生による地域貢献の活動などを掲載しています。

皆様にはこれらの記事を是非ご一読いただき、地域に根ざした本学の取り組みに、引き続き、ご支援・ご協力賜りますようお願い申し上げます。

(K)

### 編集発行

#### 県立広島大学地域連携センター

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号  
電話 (082) 251-9534 / E-mail : renkei@pu-hiroshima.ac.jp

#### 各キャンパス問合せ先

#### 県立広島大学庄原地域連携センター

〒727-0023 広島県庄原市七塚町562番地  
電話 (0824) 74-1704 / E-mail : gakuju@pu-hiroshima.ac.jp

#### 県立広島大学三原地域連携センター [本号編集担当]

〒723-0053 広島県三原市学園町1番1号  
電話 (0848) 60-1200 / E-mail : mrenkei@pu-hiroshima.ac.jp